

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法の機会が大きく失われてしまいました。すこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、法話お手紙をお送りいたします。小松教務所

コロナ禍で仏の教えを考える

仏教とコロナとソーシャルディスタンス

今、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）が世界中で蔓延していますが、コロナの感染と仏教の伝わり方って、そっくりなんです。

仏教の三大要素に『仏・法・僧』があります。『仏』は仏陀自身。『法』は仏陀の教え。『僧』はサンガという仏法を聞く為の組織（御講や同朋会）のことで、仏陀を信頼して、その教えに従い、サンガを維持することが一番大切だと仏陀は教えてくださいました。サンガは4人以上の人で成り立ちます。この4人以上という数には仏陀の深い意図があり、複数人で支えあうことで、なかなか一人では仏法を聞けないが、これなら長い期間、積み重ねていけると仏陀は考えておられました。仏法を聞くには場が必要です。その組織を設計したのも仏陀なのです。

例えば、数人が野球を一生懸命やっていたとして、技術が向上して、素晴らしいプレイをできるようになっていくと、周りの人が「なんて素晴らしいことだ、そんなスポーツがあるのか、私も真似してやってみよう」とみんながやるようになったり、支えて協力しようってなったりします。



最初は、自分たちだけの為にやってたものが、やがて社会に影響を与える様になるのです。これが仏陀の考えた組織論（サンガ）です。

コロナは、『密閉』『密集』『密接』の三密をすると世界中の人に感染しますが、ソーシャルディスタンス（社会的距離・分断）をとると感染していきません。仏教も人に会って接し、人と関



わっていかないと、この私には伝わらないのです。

こう考えてみると、私たちは、コロナ禍の今だけでなく、この数十年で見事にソーシャルディスタンス（社会的距離・分断）をとり続けてきました。現在の社会は、人と会わないで済むという、息の詰まるような便利さの中の不自由な社会です。このように感じてるのは、きっと私だけじゃないでしょう。コロナが終息した暁には、人々がこの事に目を向けて、仏陀の考えた組織論（サンガ）が盛んになる事を願っています。



『濁っている』ことに気が付こう

私が住職をしてる自坊の蓮光寺には小さな池があります。掃除するのが難儀なので、滅多にしません。「汚れてますよ」って他人から指摘されないとしませんから、掃除するのは指摘してくださる人のお陰ですね。

「私は正しい」という考え、思い込み、決めつけからの解放がないと、私たちは、相手を自分の判断で、正しい、間違っただけから解放されません。私は根本に誤ったものの見方をしていると自覚しないとイケない。この無自覚からの卒業、解放を促す言葉が「阿弥陀に出迎え」ということです。



一つの答えを押し付けて「これを信じなさい」ではなく「問い」なんです。あなたが決めつけていて、わかったつもりでいるそれは「本当ですか？」って問うてくださるのが「阿弥陀のお用（はたらき）」なんです。仏教を学ぶときに「どれが正解や」って求めて、正しい知識を身に着けるのが仏教じゃないのです。それは仏教に詳しくなってるだけで、そこに救いなんてない。それでは仏教マニアなだけです。これでは「私は知ってる、私の解釈は違ってない」ってどんどん固まっていきます。解放され、ほどけるのと全く逆です。仏教は正解を探すのとは違うのです。



あなたの握っているものを離しなさいって話です。濁ってる蓮光寺の池に住んでる金魚と変わらない私だという自覚を、親鸞聖人は「濁悪邪見」って言ったのです。偉い人ほど、このことがわからないのです。「田舎の文字も書けない人々にわかる様に繰り返し伝え、インテリは笑うかもしれ

ないけどそれでもかまわない。それでも、大切な事を伝えたいのです」と親鸞聖人は言われたそうです。

本当に大切なことは底辺に立つこと

映画解説者の淀川長治さんという人は「誕生日に一番大変だったのは、お母さんだ。誕生日ってのは、お母さんに感謝する日だ、もし亡くなっているのなら、お墓参りに行きなさい」とか「一流のものなら、クラシックからミュージカル、歌舞伎、寄席、美術品を見に行きなさい。一流のものなら、なんでも興味を持ちなさい」と言われた方でした。さらに「凄いと思ったら、共感したりするには、逆に最低のものも見たり食べたりしなければ分からない」なんてことも言っていた方でした。



淀川長治 (©朝日新聞社)

英語の「understand」は「理解する」という訳になります。これって、下に(under)立たない(Stand)と分からない、理解出来ないってことでしょう。

淀川長治さんは、朝起きると声を出して日付を言って、今日という日は、一生で一度しかない。と自分に言い聞かせ、どんなにつまらない映画であっても、下に(under)立って(Stand)見てるから「光るもの」を見つけて褒める姿勢に繋がってたんだと思います。



阿弥陀さまからの慈悲の光を浴びて

仏法に会い仏法に生きてる人は、自ずと輝いています。何故でしょうか？それは、その人の意識を超えているからです。教えが解って仏さまを信じるのではないからです。こんな私がわかってから輝くのであれば、それはいつになるのでしょうか？理屈がわからないのに何故輝くのでしょうか？それは、念仏してる人に会って、接したからです。

こんな会(遇)い難いものに出遇った、そして、自らに先立って遇われた人の歴史を歌ったのが、正信偈(正信念仏偈)です。

ご当流のみ教えは「手を合わせて念仏を称えよ」です。念仏を称える者は皆仏さまになるというのが浄土の教え。理由は、それが阿弥陀さまの本願だから私がどれだけ頭の中で理屈をこねてもわかりません。



私たちは、常に阿弥陀さまからの慈悲の光を浴びていて、どんな人も1人で生きている人はいないのです。

生かされている、というありがたさ

昨日、食べたもの全てが誰かの手によって作られています。たとえ自分で作ったとしても、太陽や雨の恵みがなかったら成長しません。私たちを生かしている力のことを、仏教では、仏さまのはたらき、お慈悲の光と考えます。私たちはそのお慈悲の光を常に浴びてるんです。仏さまのはたらきは、色も形も匂いもないから我々にはわからない。ところが、ある日突然「あ！今、何かに生かされてる」と気が付くことが、どんな人も一生の間に何回かあるのです。その大事な瞬間を逃さない様に練習しとかなないと、その瞬間を逃す事になってしまいます。大事な瞬間を逃さない為の練習に、毎日休みなく、お線香をあげ、朝のお勤め(お参り)をして、仏花を供え、仏さまのお給仕をする事が大切なのです。朝のお勤めは基本です。皆さんは「正信偈」のお勤めをしますか？



そんなお内仏(仏壇)にお参りする人(年寄り)が家族の中にいれば、その姿を孫の世代の子たちが見ています。その子たちが「これからどうやって生きてくか」「この世の中をどう渡って行こうか」って考えてしまう前に、「君がいる不思議さ」に気がつけば、その問いは変わってくるはずですよ。

蓮光寺 日野暁洋